

345 母体の抗SS-AおよびSS-B抗体による 新生児ループス発症リスクの判定

順天堂大

薄井直樹、中村 靖、伊藤 茂、吉田幸洋、
三橋直樹、桑原慶紀

【目的】新生児ループス(NLE)は、皮疹、血小板減少症に加え、時に先天性完全房室ブロックを認める疾患であり、母体血中抗SS-A抗体の関与が指摘されている。しかし抗SS-A抗体陽性例でのNLE発症率は必ずしも高くない。現在我々の施設では抗SS-A抗体陽性者に対し抗体除去によるNLE発症予防を目的として血漿交換療法を試みているが、同法は身体的・経済的負担が大きく、対象の限定が望まれる。そこで抗SS-A抗体と抗SS-B抗体の抗原特異性を分析し、NLE発症リスクのより正確な判定を試みた。【方法】二重免疫拡散法(DID)により抗SS-A抗体陽性とされた妊婦43例(SLE41例、シェーグレン症候群2例)を対象とし、免疫プロット法(IB)により抗SS-A抗体は60kDと52kD SS-A抗原に、抗SS-B抗体は48kD SS-B抗原に対するそれぞれの抗体を検出しNLE発症との関連を調べた。【成績】(1)全対象例におけるNLE発症は11.6%(5/43)であった。(2)IB法による60kD SS-A、52kD SS-A、48kD SS-B抗原に対する抗体の保有例は、それぞれ37、12、12例であり、NLE発症率は13.5%(5/37)、25.0%(3/12)、33.3%(4/12)であった。(3)60kD SS-A、52kD SS-A、48kD SS-B全て陽性であった者のNLEの発症率は60%(3/5)であった。【結論】抗SS-A、SS-B抗体の抗原特異性を分析することにより、NLE発症リスクをより正確に判定することが可能であり、NLE発症予防を目的とした血漿交換療法は、抗SS-A抗体陽性者のうち、48kD SS-Bに対する抗体保有者を対象とすることが望ましいことが明らかとなった。

346 徐脈性不整脈合併妊娠・分娩に関する 検討

国立循環器病センター 周産期治療部

岡本陽子、根木玲子、山中薫、京野和夫、宮下進、
村上典正、小林秀樹、高橋俊一、千葉喜英

【目的】徐脈性不整脈合併妊婦の妊娠・分娩・産褥管理方法を考察することを目的とした。さらに分娩時におけるペースメーカー(PM)の使用適応について検討した。【方法】1982年1月から96年9月までに妊娠・分娩管理を行なった283例の不整脈合併妊婦より徐脈性不整脈を合併する妊婦34例を抽出し、妊娠・分娩経過や検査所見等を比較検討した。【成績】徐脈性不整脈34例の内訳はsick sinus syndrome(SSS)11例、完全AVブロック(CAVB)18例、QT延長症候群5例である。妊娠中に動悸や胸部不快感などの自覚症状を訴えたものは14例あり、いずれも妊娠経過とともに症状の増強をみた。うち3例に意識消失発作が出現した。妊娠中に心肥大を認めたものは4例あった。分娩時に植込み型もしくは体外PMを装着していたものは18例(埋込み型11例、一時的PM7例)であった。分娩は産科適応の帝王切開が4例、30例が経膣分娩であった。経膣分娩中19例が硬膜外麻酔下の分娩であり、14例が鉗子分娩であった。分娩時のPMの作動例は15例であり、いずれも安全に分娩を終了した。また胎児発育は1例(IUGR)を除き正常であった。【結論】徐脈性不整脈合併妊娠においては心拍数の調節が重要であるが、PMの使用の即応体制と硬膜外麻酔分娩により徐脈型不整脈は比較的安全に分娩可能である。